

花冠

高橋正子句集

序

正子さんの俳句は、インターナショナルであり、インターネットである。

ベルリン

カスターニエの青き実曇天よりもげば

この句は、ドイツの句会に家族で招待されたときのもので、カスターニエと曇天というドイツの風土にふさわしい言葉を使って、季感溢れる風景を詠むことに成功した。この句には、季語はないが季感があつて、その奥の風土と自然を捉えた。ものの本質を見たのである。日本の風土に捕らわれずに、ドイツの風土を確かな目で見た。ここがインターナショナルである。

パソコンを消して露散る夜となりぬ

海外の俳人たちとの交流は、三十数年になり、インターネットでの俳句交流も長い歳月を経て、自らの句を育てている。

来たぞ来たぞいつもの目白が蜜吸いに

野ばら咲く愛のはじめのそのように

スイートピー眠くなるほど束にする

白バラの空気を巻いていて崩る

胸うちに今日の夏野を棲まわせる

これらの句は、俳句が詩であることを教えてくれる。言葉のいきいきとした律動があつて、紛れもなく詩である。在り来たりの五七五という音数律に縛られたものでなく、作り手自身のリズムがあつて快い詩情が伝わってくる。

正子さんの俳句の基本を指導したのは、川本臥風で、その先生が臼田亜浪なので、その影響を素直に受けた。自由であつて、ものの本質を見ることを学んだ。さわさわと吹く風に深さを感じ取るように、句がさわさわとして深いのは、その成果なのである。

さわやかに行きし燕の戻り来る

春の露提げしわれにも風が付く

わが視線揚羽の青に流さるる

天草の乾いた軽さを腕が抱く

本句集の代表句を挙げるすれば、

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

を採ることに、躊躇うことはない。俳句の「まこと」を読み取るこ

とができるので嬉しい。

平成十五年早春

高橋信之

目次

序……………高橋信之……………	1
メイン河畔……………	5
花冠……………	19
あとがき……………	37

マイン河畔

昭和六十一年

花苗を子に植え庭に五月来ぬ

撒き水の虹を生みつつ櫛ぬらす

ひろびろと来て秋風の子を吹けり

昭和六十二年

長女句美子入園

若葉蔭水を出しつつ靴洗う

すずしさに星座の話読みつなぐ

長男元、鹿島にて

秋海の波止へ斜めに泳ぎ着く

昭和六十三年

来たぞ来たぞいつもの目白が蜜吸いに
らくだ舎に黄沙ひたふる白い昼

春の空幼な心の象を見る

花あけびゆらゆら青い時の中

野ばら咲く愛のはじめのそのように

水笛を梅雨すみとおるまでに吹く

蝉を画く目をくるくるとまっ黒に

姪の淑誕生

色白き赤子眠れる晩夏の玻璃

大洲・山荘画廊

花束のいずれもさやけく信之個展

平成元年

デイズニールランド

うすみずいろという水あつて春の城

映画ラストエンペラー

亡ぶ者にポピーの花の紙みたい

見上げれば青ぎんなんのすずやかに

綿の花きようはうす紅それで散る

赤とんぼ群れ飛ぶ空気の層々に

平成二年

ストールをひらりと剥いで我にもどる

春立ちてもものの影踏むこと多し

彼岸桜白ともならず甕に咲き

翡翠をはつと止まらせ芽ぐむ木々

しゃぼん玉少女が吹いて松の枝（え）まで

句美子

柏餅ふかしている中子が帰る

元、大洲へ

繋がれし鶺鴒舟を飛んで少年期

家族四人でドイツ旅行十六句

ラインのぼる巨船の人の裸かな

ローレライの岩と夏空遠ざかる

空耳に蝉音湧きけるラインの駅

マイン河

音なき河森また村の夏灯

マインの流れ明るき夜の家族の旅

ヴェルツブルク

鐘の音のわれを包んで夏空へ

かつこう時計売る店奥の晚き夏

要塞の夏日に白らむマリアの丘

ヴェルツブルク・フォーゲルヴァイゼの墓

黒つぐみ詩人の墓も緑蔭に

ベルリン

カスターニエの青き実曇天よりもげば

ベルリン、ブランデンブルク門

人間は夏日に小さし門をくぐり

ベルリン動物園

うつそうと茂り象飼う動物園

ミュンヘン

大噴水に少し濡れつつ腰を掛け

夕焼けにからくり時計の鳴るを待つ

柿熟れてフランクフルトのマーケット

マイン河畔・ガーデンパーティー

すもも甘し庭はいつしか青く暮れ

鞆より木の実ソックス子が取り出す

冬の夜の子はそれぞれに読んでいる

もろもろもパンも年越すたのしさよ

平成三年

雛納めそのあと凜とフリージア

春海の水底見する観覧車

古茶新茶朝のすずめに歌われつ

青葉木菟蒲団うすうす子のねむる

若葉雨滴る音と降る音と

蛍火の風の速さに消えいたり

梅雨出水しぶくをねむの木ねむの花

夜の田水白壁映る一直線に

朝夕の大き弧に咲く濃りんどう

新米の飯のかおりにからし漬け

蓮根の土のあらたに描かれし

寒蘭の花のみどりを起居の目に

平成四年

ゆうぐれの空は水色雛まつり

春疾風子は目をまんまるく帰り来ぬ

佐田岬灯台二句

灯台へと芽木をなぶりし風を行く

灯台へ回れば菜の花なだれ咲く

出石寺泊二句

勤行の朝の伽藍へみそさざい

雲海の下界をかくし花は三極

面河へ二句

ねむ揺らし山霧山へ立ちのぼる

晩夏の雨一ふりかかる背のリユック
杉丸太雪に湿って荷となれり
柚子湯の子湯浴みの音をひびかせる

平成五年

甲板に犬連れ夏の海渡る

高階のわが家の幸に夏雲も

朝涼し湯の沸く音を傍におき

鉄色の空に音立て銀杏黄葉

平成六年

わらび餅水のかがやく午後にして

リラ冷えに少年ひたすら学ぶなり

初夏の夜の電車傾きつつ曲がる

今日も降らない夏雲絹のごとくあり

江川崎へ

水路鳴り稲穂田はやも匂いくる

大洲、西村健一先生居

大玻璃に今夜の月の出る空を

氷上の全く青きを滑り遊ぶ

平成七年

阪神大震災

大地震地が割れ水仙地に咲ける

スケート靴脱げばエッジの春くもる

春一番闇が鳴る音つくりつつ

花冷えにシャツごわごわと着られいる

バラ真紅水に親しく活けられる

梅雨降りだしラガーに戦いはじまりぬ

砥部・陶房葉月二句

陶棚のつづきに梨の青い茂り

轆轤回る初夏の光のそこここに

藺の花はつねに空突く曇り空

元、愛光高校一年

白シャツに風入れ友と居て倦まず

松野・不器男記念館

ピッケルの静かに置かれ夏の家

蝉の死の乾くでもなく涼しげに

霧に育ち大根くゆりと葉を反らす

蒲刈られ刈り口きらり冬の陽に

教会の縦の青枝聖祝日

花冠

平成八年

戸外の冷え蜜柑の箱を包む冷え

砥部七折

梅の枝きゅつとくくられ鋭き匂い

れんげ鋤かれいまは土の香となれり

近寄れば真実リラの匂いける

松林の五月ひやひや首筋に

ポプラ青葉静かに動くそのかげり

青萱の葉のすつきりと琉球畳

野に出でて日傘の内を風が吹き

揚花火開いて落ちる水くらし

生家、福山郊外能登原

盆歌の抜ける一村星の村

ぶどうの露も口にふくみて朝の句座

栗飯の栗を噛みいる古厨

ドア開けばさくら黄葉の朝が来ぬ

静けさのその中心に鴨泳ぐ

停船の灯の華やげる大晦日

平成九年

耕して水仙を天まで匂わせる

猫柳ふつくら水の流れ来る

愛媛病院に信之入院

雪の病舎牛乳壺の鳴る音す

罫りの抜け来る空の半円球

雛あられ色かるやかに混ぜ合わされ

異国では復活祭よ朝の冷え

スイートピー眠くなるほど束にする

いんげんの収穫雲は流るのみ
麦茶飲む細き手脚を折り曲げて
梅干に土用の陽の香をぞんぶんに
バラに施肥土の寡黙を掘り起こし
こどもらが密かに葛湯吹いている

平成十年

ふきのとうに紅ほのぼのと土に生れ
ごつごつにもまれし新茶封切れば

コーヒーに水の旨味よ花の朝
高窓のガラスを花の埋めつくす
白バラの空気を巻いていて崩る
ビルの窓全てで五月の空なせり

上野・西洋美術館

いとけなき白もて画かれゴツホのバラ
笹百合に清水のごとき朝日差し
バスの後ろ揺らし入りゆく青山河
脩の忌の雲に雲湧き秋近し

古岩屋

沢水の足の甲越す蟹捕れば

ダムあまた見し瞳に山女の焼かれけり

銀杏黄葉市電は丸くカーブする

平成十一年

せせらぎの砂に日差してお元日

元、慶大環境情報学部入学

ひなあられ送る荷物の隅に入れ

仰ぐ空のおおかたを占め花あんず

小田急江ノ島線

特急の窓を芽木の揃いて過ぐ

小田急線大和

駅を発ちたちまち辛夷の花あかり

旧制松山高校の碑

春雨の止みしか石の芯冷ゆる

双眼鏡に春行く雲の一朶入れ

句美子より母の日のプレゼント

パラソルに薔薇の一枝の刺繍され

いちじくの若葉芬々たる夕べ

胸うちに今日の夏野を棲まわせる

呼んでみるかなたの空の雲の秋

十六夜のものみななべてみずみずし

高階も木犀の香のひろがりに

手袋に手を入れ五指を広げみる

冬の夜の捨つべきものを分け終えぬ

大年の山河も晴れを賜わりし

平成十二年

寒林を行けばしんしん胸が充つ

水仙の枯れし終わりを折りて捨つ

鴨泛かぶ池の青さのまっ平ら

初雲雀田舎の空の傾きぬ

来るまでの辛夷のひかり見ては待つ

水煙創刊二百号記念大会、東京深川芭蕉記念館

新緑の翳るときあり水のあり

隅田川

都鳥春の空より羽音させ

砥部・真砂家

満天星に水はくらきを流れ来る

青蔦に夕陽あまねき道を帰る

ハム削ぎ切り新玉葱の白を載せ

てのひらに書を読む梅雨のすずしさに

青年ら鮎を食べんと昼の間に

鎌倉街道

昼顔を眸に映し旅ひとり

ベイ・ブリッジ

梅雨明けの海の真上を渡りきる

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ

さわやかに行きし燕の戻り来る

パソコンを消して露散る夜となりぬ

月明に柝はゆたかに葉を広げ

マンジロウ南瓜鉄色宿坊に

慶大湘南藤沢キャンパスにおける元の研究室

月澄んでガラス巡らす研究棟

多摩美大

擗散る大きな風のありさまに

芦ノ湖

暮れなんと湖のあかりの冬青し

十五夜の箱根山道踏みおりぬ

ポプラ黄葉雲寄り雲のまた流る

臼田亜浪五十回忌、中野宝仙寺

亜浪忌の墓碑の亜浪の字に見覚え

臥風忌の今日にわが句の刷り上がる

枯草を踏みおり人に離れおり

平成十三年

元旦の木々と空とに迎えられ

マリアアッタさん夫妻と

薪ストーブ静けき熱をわれらに放ち

しみじみと刈田に差して原始の陽

春の露提げしわれにも風が付く

松野・不器男記念館

詩人死してただ春風の竹葉吹く

芸予地震

朝霞青し余震に覚めてより

春ほのぼの棚に上げたる書の紙も

羽田空港

空港のつばなきらめく風に立つ

メトロポリタンミュージアムのかば像

かばの青かばの孤独の春惜しむ

鎌倉

北に来て柿の若葉にまた会いぬ

聖書繰る野の青麦を思いつつ

明け易き時をラジオのミサ合唱

わが視線揚羽の青に流さるる

夏蒲団の糊の匂いて身に添えり

白桃の無疵を少女に剥き与う

稲穂田の隅にごぼごぼ水が鳴り
部屋を得て少し書を読み涼しかり
にが瓜の苦さに酔いて月すずし
とんぼ触るる水に草かげ空のかげ

盛岡の光雅さんより玉葱を頂く

冷たさも露けさもスライスオニオン
鵪鶉と蜻蛉と浅き田の水に

手の中の木の実の熱き山の暮れ
手に触れて硬き林檎を二つ選る

平成十四年

芽麦まで遠き夕陽の差しいたり

句美子受験二句

鉛筆を削る木の香の春めくを

受験子の髪ふつくらと切り揃う

句美子慶大理工学部入学

煙る銀杏芽吹く気配を一心に

銀座

春陰のどの地下口も入りやすし

浅草二句

祭笛山あじさいも街中に

大川に潮の匂うや三社祭

浜名湖の水の五月を新幹線

葉桜に夜も残れる空の紺

ほととぎす啼きつつゆくも空の中

淡路島のあや子さんより頂く

天草の乾いた軽さを腕が抱く

愛媛大学

学生食堂ひとりの顔に夏日あり

子が去りしことも静かや夏の齒朶

蛩ぶくろ霧濃きときは詩を生むや

詩に倦んで親しき灯火を小さくす

水煙創刊二十周年記念富士山頂俳句リーダーディング五句

稜線の夏空切るを見つつ登る

宵寝するに明るき窓の登山小屋

夏星を登りぬ一步を岩に置き

富士山頂七月三十日午前四時四十五分

あたたかき御来光なり登山者に

俳句リーダーディング

ラバに立てすぐ夏風の日章旗

白血に葡萄は露をこぼさざる

パイプ椅子天の川へと向け置かれ

石鎚山

雪嶺の座りし空のまだ余る

あとがき

このたび、水煙創刊二十周年記念事業の一環として刊行される水煙叢書の第二巻にこの書を入れていただくことになり、大変うれしく感謝の念一入であります。この句集は、私の第一句集「月の檜」（昭和四十一から昭和六十一年春）以後の昭和六十一年から平成十四年までの十七年の間に「水煙」に発表した句から二百二十四句を選び纏めました。昭和六十一年は、長男元が小学校に入学し、長女の句美子が七五三のお祝いをし、また、主人が網膜剥離で数度手術をした年です。それから十七年が過ぎ、今年、元は大学院に進み、句美子は、この九月には二十歳の大学二年生で、それぞれ自分の道を見つけてくれて、母親としての一区切りがついたところです。従って、この句集は、子育てただ中の俳句となつていきます。これまで三十八年間俳句を作れる環境がずっとあつたことは幸せで、私にはかけがえのない句集となつたことをありがたく思います。

前半の「マイン河畔」は、ドイツの旅を中心にしている、ドイツでの俳句は、一九九〇年ドイツ統一の年の夏に、漱石の研究者でもあるワルツオック博士の主宰するフランクフルトの俳句会に招かれて家族四人で出かけたときのものです。そのときの我々の訪問は、フランクフルトの地方紙に載つたり、マイン河畔でガーデンパーテ

イーを開いて戴いたり、随分楽しい思い出として残っていますが、私の内面においては、ドイツの旅はそれ以上のものでした。ルフトハンザ機が、物音もしないシベリアを越え、リューベックの上空に差しかかったとき、リューベックの街の屋根が朝日に宝石のように耀き、確かにヨーロッパの街の存在を知らせてくれました。小学生の時に幾度も繰り返し読んだアンデルセン童話から思い描いていた街と違わない街がそこにあったということは、私を育んできた精神がそこにあるということに他ならなかったのです。また、ベルリンには、戦後を育ってきた私にとって、戦後の痛みを共有できる何かが残っていました。カイザー・ウィルヘルム記念教会の空爆で折れた黒い塔は、私には原爆ドームを見るような思いでありました。路上で大声で諍うポーランド人の夫婦。夕陽に二マルクのピザを求めて列を作る人々。権威と権力を翳したような建物。ベルリン動物園の森のような茂りに売られているアイスクリーム。壊されたベルリンの壁。それは、日本にすでに無くなってしまった戦争の痛み、の心情そのものであるように思えました。フランクフルトの自由さ、ミュンヘンの明るさ、ヴュルツブルクの宗教的な雰囲気、ライント下りの楽しさ。それらは、日本の風景よりも却って、私の原初の心と呼び起こして俳句となりました。

後半の「花冠」は、信之先生が開設したホームページで、インタ

インターネットを使って俳句活動ができるようになってからのものです。インターネットは、私に、俳句の読者の層と範囲を広げてくれました。ユネスコのパリ本部の詩の部門に日本では唯一水煙がとりあげられ、富士山頂俳句リーディングに象徴されるように、俳句が世界の詩として認められたことも、私の句には、大きな意義となりました。また、インターネットを使う必要から、パソコンの思想に触れ、「言語とその本質」についてのよくわからない部分もありながら、多くの書物に接し、俳句形式の裏付けを得たことは、この時期、俳句への懐疑を払拭してくれるものとなりました。インターネットの俳句を考えるうち、言葉は平明を心がけ、心は物から離れないようにし、物に照り映して見るようになりました。今、インターネットの俳句こそが、俳句の本質に近いものではとも思えます。

日々の俳句は、生活はシンプルでありたいと思いますので、句は、素にして清潔な花のようなであることを願い、作り繋いでいます。その花冠をこれを読んでくださるかたに、祈りをもって捧げます。終わりにりましたが、信之先生に序をいただき、編集の労を採ってくださいったことにお礼を申します。また、青葉図書専務の村上和興氏にも、出版にご尽力いただきましたことを、厚くお礼を申しあげ次第です。

平成十五年三月一日

